

〈報告(3)〉

アーカイビングと情報的正義からみた 融合のプラットフォームとしての大学の可能性

サトウタツヤ

(文学部教授・研究部長・衣笠総合研究機構長)

文学部のサトウです。3番目の登場ということで、起承転結という型でいえばの「転」になります。4番目の「結」の方に最後はまとめていただきます。実際的な話というより理屈っぽい話になると思います。ここでは情報的正義ということをお願いします。私自身これまでは学融の理論を重視してきました。学問が社会とどう関連するかという理論自体を考えないといけないだろうと思ひ、ギボンスらのモード論を中心に学問のあり方について考えてきました。学問には学範関心駆動型のモード1と社会関心駆動型のモード2という二つのモードがあると考えられるのです。基礎と応用ではなく、モード1とモード2と考えるのです。私がやっている法と心理のプロジェクトも、モード2の典型なのですが、現実問題を解決するために学問がある。それを応用などとは言わずに、社会関心駆動型と位置づけようということを理論的に考えているわけです。「学融」という言葉を使います。「学際」という言葉はお聞きになっていると思いますが、これはインターディシプリナリーです。Interではなくtransを用いて、トランスディシプリナリーという言葉があります。トランスは訳しにくくて「融」と訳すべきだと思っていますが、融合と考えた方がいいだろうと思っているわけです。

そもそも、学知の展開には3つある。学粋、学際、学融です。学粋は社会学、心理学がその中でやってきて、昔の論文を読んで、今流行の論文を読んで問題を考えるやり方。学範の元の言葉であるディシプリンは、しつけのことなんです。しつけと同じ言葉ですから、学問には学問のしつけがありえるわけです。心理学者が社会学の方がいいといっても、それは無いものねだりです。しつけは家庭ごとに行うもので、よその家には及ばない。たとえば、子どものころ親に対して「お小遣いを何とかちゃんはいくらもらっている」というと「それな

ら、よその子になりなさい」ということになっちゃうわけです。学問にもそういうところがあって、学粹主義にならざるをえないところがあるんですが、学範（ディシプリン＝しつけ）を積み上げていくやり方は学粹的なやり方という言い方で相対化しておく必要があります。また、子どものしつけでもそうですが、しつけは手段であるはずなのに、しつけ自体が目的になってしまうことがある。ただ厳しくしつけるだけで何も成果が出ないのであれば問題です。

学粹に対しては、学際研究という言い方で対抗軸が設定されることがあります。しかし、これは「問題」が共有されてはいるけれど「解決」は共有されていない、ということが出来ます。家族社会学と家族心理学がある。前者は社会学にとって学際領域であり、後者は心理学にとって学際領域です。そして両者は家族という問題は共有しています。人口がどうか、家族成員数はどう変わってきたかというのが社会学的なスタンスです。一方の心理学では親子関係と発達の間を関係を検討したり、家族療法がある。ただし社会学や心理学の学範（しつけ）通りにやることを目標にしているので、家族社会学と家族心理学は決して両者がオーバーブリッジ（架橋）されていなくても良いのです。問題の共有というのはそういう意味です。これが学際です。

それに対して学融というのは問題の解決こそを目標にコラボレーションしていく。社会学や心理学の学範（しつけ）通りにやることを目標にしないのです。学範にこだわるより解決にこだわるので、必然的にオープンになっていきます。

今、学際ではなく、学融ということを言いましたが、繰り返しますと課題の共有ではなく、問題解決の共有を目指すことです。そもそも学際、際というのは端っこのこと、これは日本的な価値観でいうと「際物＝きわもの」でありマイナス評価になります。それに対して学問と社会の融合を目指す価値転換をしていく必要があるというのが学融の立場なのです。ただし、問題解決をする時に、固有のリソースがなければ誰も友だちになってくれないというのがあります。社会学でも心理学でも、それぞれの利点なり、特色がないとだめなのです。

ここまでは、学問の融合ということを考えましたが、大学と地域の融合についても同じように考えることができます。問題を共有するだけなのか、解決を共有するところまでいくのか、ということです。大学が地域貢献するなどというのは今ではありふれたクリシェ（紋切り型的な言い方）ですが、地域貢献も学際型と学融型があるでしょう。つまり、問題のみの共有か、解決の共有か、

ということです。

大学ならではの地域貢献をするには、大学ならではのリソースが何であるかを考える必要があります。評価（学位授与）、時空間がある（京都駅前で会議室を一個借りたら相当な値段がするわけですが、大学だったらタダになる）、そして、何より、学生・職員・教員という人的資源が豊富です。これらのリソースを他のパートナーと共有していくことが大事なんだと思います。

ここで時空間の活かし方を考えてみましょう。個人や組織が保存できない資料を大学という永続的なシステムが保管できたら面白いし、民間ならではの情報保管ができれば有効だろうというのが私の考えです。公的機関ではなく民間である私立大学が個人の情報を銀行のように保管できると面白いと思っているのです。こういうことをいうと、倫理的に問題だ、具体的には個人のプライバシーの問題はどうするのだ、などと言われたりしますが、倫理の問題ではなく正義の問題として考えればそれなりに解決するように思えます。

情報倫理ではなく情報正義を考えよう、ということです。

たとえば障害を持ったお子さんのことを考えましょうか。

現実には、記憶や計算がおぼつかないので、一人で買い物ができない、などという状態を考えてみましょう。一人では買い物できない、このことを称して障害などと言ったりするわけですが、条件を整えれば買い物だって決して不可能ではない。今は携帯電話やスマホが画像を扱えるので、店についたらまず電話して、メールで買うべきものの画像を家から送ってもらう。そうすることで一人で買い物ができたりする。そういう条件をうまく申し送りすることができれば有効なのですが、そういう情報を行政や学校は持ちたがらないという現実があるわけです。中学校では中学校の時しか抱えられない、抱えたくない、というわけです。小学校の時の情報は知らない。高校に情報を送ることもできない、というわけです。個人の人生は不断なものでつながっているのですが制度としての学校は断片的に時間をぶつ切りにしてしまいます。

人生に関する情報を一種の銀行（バンク）として持つことができれば、それがたとえ不利な情報であっても、いや、むしろ不利な情報だからこそ、そうした不利を補償するための条件整備ができるのではないかと思います。倫理的にはグレーかもしれないけれど、個人の人生を支えるという正義を実現することができるのではないのでしょうか。つまり、小中高という分断された状況があるとすると、そこから少し離れた大学が、ある個人の情報を保有して、その

時々に必要な支援を行う際の参考にしてもらえばいいということなのです。そしてそれこそが正義になるということもありうるのではないかということです。

心理学者である私が正義などということを述べるのは、私が法心理学という領域に足を突っ込んでいることとも関係しています。虚偽自白で冤罪になった事件などをみると、それがどのような形であれいっぺん自白して調書に残っていることが多いわけです。不利な情報です。現在の訴訟システムには最良証拠という概念があり、良い（誰にとって良いかは別として）証拠が一つでもあれば、有罪認定に持ち込めるということが出来ます。「やってない！」という自白調書もたくさん積み上がっている中で、一個だけでも「やりました」という調書があれば、それが最良証拠になってしまう、ということは大きな問題なのではないでしょうか。こうした場合には不利な情報（やってないのにやったという自白調書があるということ）があることはどういうことなのかを考える必要があるのです。現在、私たちは自白の変遷分析というのをしていますが、たとえ不利な情報であっても、より大きいコンテキスト（文脈）に位置づけて考察することによって、本人にとっての宝の山になるということはあると思っています。

いかなる意味でも情報は隠さず、廃棄もせず、全部を活用して個々人の人生を支援するというのが情報的正義という考え方です。プライバシーは守られるべきだとか、不利な情報は知られたくないということも一理ありますが、だからといって情報が廃棄されたりしたのでは正義が実現されないと思われます。

情報的正義というのは多種多様な情報が行き合い、社会的判断を下すことという状態を担保する状態を理想とします。それを大学という場が時空間を活かして保存していくことができないでしょうか。それこそが大学の貢献なのではないでしょうか。大学は今後100年も200年も続くわけですから、ある一人の生き方の資料を持つことで、その人の人生が歴史になっていくかもしれません。これまで、歴史は一市井の人々の生ではなく一国の興亡や政治家の動向がメインでした。そうした情報しか残っていなかったからです。政府とか軍がドンパチやったことは残っていくが、現実に生きている人、あるいは戦争で死んだ人の情報は残っていなかった。それと同じように、現在何らかの不利益を被っている方の情報が残らなければ、非常に偏った歴史が書かれてしまう可能性があるのです。

私は前職が福島大学の教員だったこともあり、3. 11以降に福島の方と話を
する機会があります。2013年になっても島の農産物は売れていない。いわゆ
る風評被害です。福島の方の方は関西の方がどう思っているか全くわからない
ので、どう思っているか知りたいというリクエストがあります。立命館大学
は震災の取り組みも多くなされていて、頼もしいのですが、それはたとえば、
教員が現地で何か（たとえば相談業務）したり、学生を福島につれて行ってボ
ランティアに従事する、などということが多い気がします。逆に関西の人が、
3. 11以降の福島のことをどう思っているかを福島に発信するというような
ことは考えていないようです。最近、授業の時間内に学生のみなさんにアン
ケートをとらせてもらったんです。今は、授業中にアンケートをとるなんてと
んでもない、というような風潮がありますが、それは本当に一面的な考え方だ
と思います。ついでながら、心理学や社会学ではアンケートをとる時には匿名
にするのが普通です。「あなたのことは関心ありませんよ、あなたの中にある
内向性、性格のことだけ教えてください」と性格のことやストレスのことを聞
いているのです。「アンケートに回答しているあなたには関心はありませんよ」
という採り方をするのが「倫理的」だとされているのですが、そういうこと
で良いのか、ということも考えさせられます。

関西の人が何を考えているのかを知りたいという人がいるなら、それに応え
ていくのも情理的正義なのだと思います。アンケートの結果をまとめてみた
ら、いかに無関心かという結果が出て、がっかりしたんですが、それでも福島
の方は実態を知りたいわけです。

ややくどく繰り返しますが、心理学では人間は変数の束であるという人間観
をもっている。社会学も同じで、あなたには関心はありません。あなたがどう
いう階層出身で、お父さん何人家族で、どういう大学にいつているか、そうい
う要因しか知りたくありませんよ、といて調査をしていることが多いのです。
これはどうなのか！と思うわけです。そうではなくて、現に存在する個々の
人々、固有名をもった個々人のあり方と向き合うような調査をすることが必要
なのではないかと思っています。

そして学生のみなさんの一人ひとりが（匿名であるか顕名であるかは別とし
て）自分の存在を賭けて「こう思っていますよ」ということを回答してくれる
ならば、その情報は今後の連携の素材になるのです。ちなみに、アンケートに
回答してもらった学生さんたちに、福島にちなんだ川柳を作ってもらいました。

これらの川柳も現地の方に見てもらいました。

- 福島の 情報知らず 恥を知る
- 生の声 大事にしたい これからは
- わかってる しかし買えない ジレンマよ
- 支援したい けれども怖さが ぬぐえない
- 風評に 騙られていた 2年間
- 福島の 食材食べて 貢献を
- 福島に 私の気持ち 伝えたい
- フクシマを 私たちの手で 福島に

大学にとって、こういう形での地域貢献もありうるのではないのでしょうか。現にいる一人ひとりの生きざま自体が大学の大きな資産でありリソースだということなんだと思うのですが、どうでしょうか。

大学にとって大学生は顧客であってお客様であるから、ご機嫌をとって保護しなければいけない、という考えも一理ありますが、そういう姿勢は大学が学生を囲い込んでいる感じがするんですね。そうではなく、常にオープンシステム（開放系）として、外界と相互交渉する存在として大学は頑張っていってもいいように思います。学生の個々人が思っていることを福島に提供するお手伝いをするということも地域貢献の一つの形なのではないのでしょうか。最後にまた、脱線しますと、オープンシステムにはオープンシステムの理論があります。ベルタランティという人が、一般システム理論をつくった時に「オープンシステムというのは外界と交渉しているのは実は複線性をもつ」といっているわけです。Aが起きたらBが起きる、という直接的なコーズ・エフェクト（因果）な関係ではなく、ある結果に対して複数の道があるというのがオープンシステムの特性なんです。これは複線径路等至性モデルという別の話になりますので今日は述べませんが、大学が地域と関わって行くときの大学ならではのポテンシャルについて考えてみました。

冒頭に言いましたように、起承転結の転の役割を果たしましたので、結の登壇者の先生に期待したいと思います。

どうもありがとうございました。